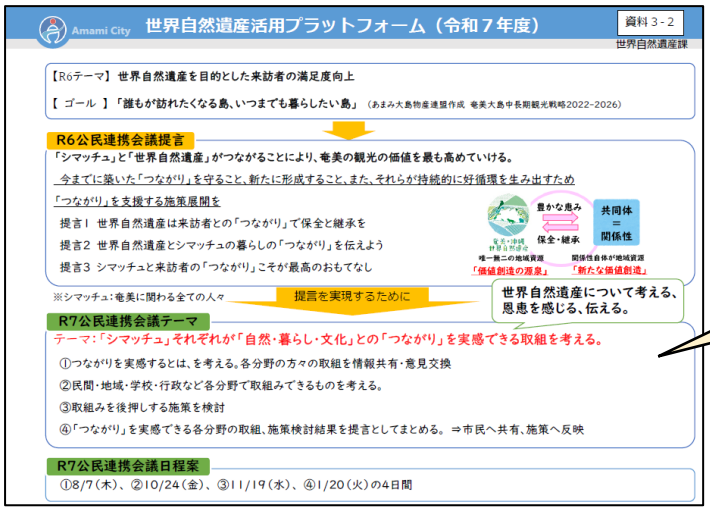
奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム
令和７年度 第２回公民連携会議　会議録

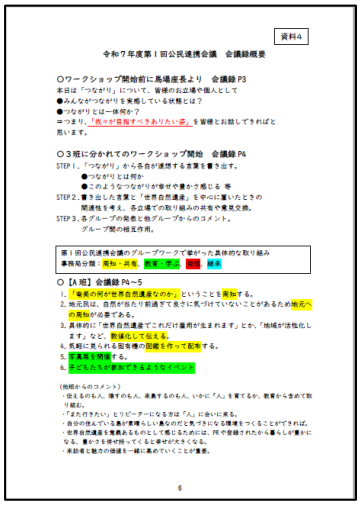
日時：令和７年10月24日（金）13：30～15：30
場所：奄美市役所 名瀬総合支所８階委員会室

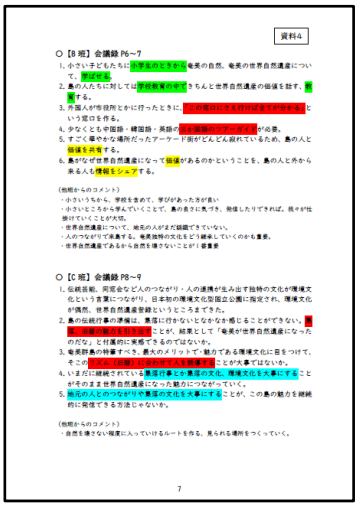
１．開会
２．コアメンバー自己紹介
　NPO法人アマミーナ　徳 雅美委員の代理出席　吉村　喜美代氏の自己紹介
３．議事
（１）前回の振り返り
　　事務局より８月７日（木）開催の第１回公民連携会議の振り返り

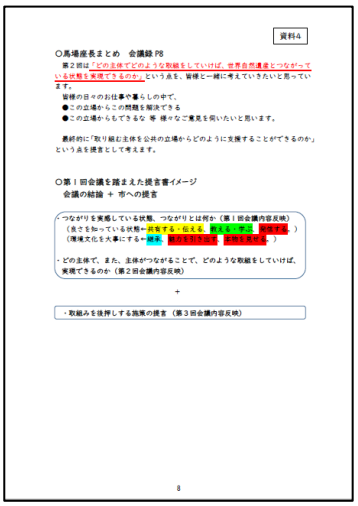


令和７年度の公民連携会議のテーマについて再確認

第１回会議の会議録概要に基づいた確認







⇒第１回会議で挙がった意見は「周知・共有」「教育・学ぶ」「発信」「継承」の４種類に分類が可能である。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム
令和７年度 第２回公民連携会議　会議録

第１回　会議をふまえての事務局が想定する提言書イメージ

会議の結論 ＋ 市への提言

・つながりを実感している状態、つながりとは何か（第１回会議内容反映）
（良さを知っている状態←共有する・伝える、教える・学ぶ、発信する。）
（環境文化を大事にする←継承、魅力を引き出す、本物を見せる。）

・どの主体で、また、主体がつながることで、どのような取組をしていけば、実現できるのか（第２回会議内容反映）

＋

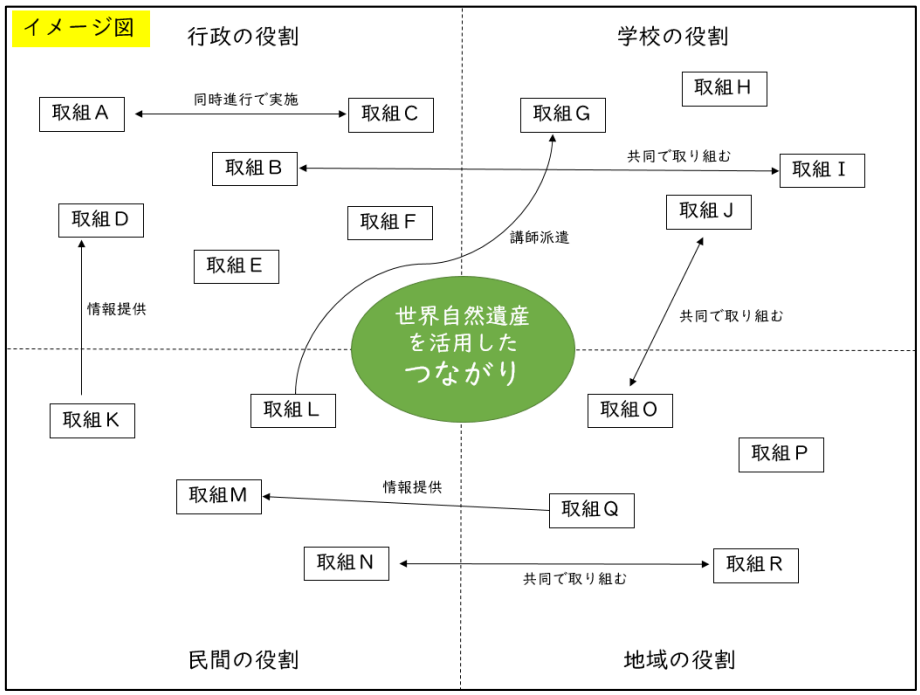
・取組みを後押しする施策の提言（第３回会議内容反映）

（２）ワークショップ

◆ワークショップ開始前に馬場座長よりご説明

事務局からもご説明いただいたとおり「どの主体で、どのような取組をしていけばいいのか」という具体的なところをみなさまと一緒に考えていきたいと思います。

第１回会議の中で、みなさまそれぞれのお立場から具体的なお話をたくさん出していただきました。今回はそれぞれの立場から、例えば「公教育の立場であればこういう取組ができるのではないか」等、出していただこうと思います。机上に「イメージ図」があります。



このイメージ図が本日のアウトプットのイメージ図になるかと思います。

前回の内容をふまえて事務局でまとめていただいた内容は
●つながりを実感している状態、つながりとは何か
●良さを知っている状態でそして環境文化を大事にしている
この２点がポイントとなっていました。

そして、サブカテゴリーとして
●「良さを知っている状態」とは「共有する・伝える」、「教える・学ぶ」、「発信する」
●「環境文化を大事にしている状態」とは「継承」、「魅力を引き出す」、「本物を見せる」
となっています。

そちらについて「イメージ図」の４つの立場（行政の役割、学校の役割、民間の役割、地域の役割）から「このような取り組みができるのではないか」とみなさまの中にある取り組みを出していただきます。

そして、イメージ図の中に矢印でつながっているものもありますが、例えば「共同で取り組んだ方がいいです」とか「この取り組みについて、こちらの主体にも情報提供した方がいい」等、矢印が引けるはずです。

第２ステップとしては、「役割間の関係性」についても、みなさまでお話しいただければなと思います。

そこでまずは、みなさまそれぞれのお得意の立場から考え得る取り組みについてお話しいただいて、取り組みを出し切ったあたりで「主体間の関係性」というところもお話しいただければと思います。
また、第１回会議では取り組みについてのカテゴリー分けをしていないため、そちらをあらためて挙げていただいても構いません。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム
令和７年度 第２回公民連携会議　会議録

◆３班に分かれてワークショップ開始（約６０分間）
Ａ班：池野委員、越間委員、近藤委員、事務局職員
Ｂ班：新屋委員、濱田委員、吉村氏、事務局職員
Ｃ班：稲元委員、境田委員、﨑田委員、事務局職員

STEP１.各主体（行政・学校・民間・地域）でできる取り組みを考える。
STEP２.各主体の関係性（つながり）について考える。

（３）各班発表
（各班が作成したイメージ図は 12～13 ページに掲載）

◆Ａ班の発表(池野委員、越間委員、近藤委員)

最初に学校として問題点をいくつか提起させていただきました。
子どもたち、小学生たちが「世界自然遺産」ということについてどれくらい知っているのか・興味があるのかということについて、なかなか「子どもたちのなかで“世界自然遺産”についてイメージが広がっていないよね」という意見が出ました。
では「子どもたちに世界自然遺産のことを伝えていくためにはどのようにしていけばよいのだろうか」ということで、例えば総合的な学習の時間で、今までは地域のことについて学ぶことはやってきているが、世界自然遺産を学ぶ時間も何時間か取り入れられないかという意見が出ました。
ただ、世界自然遺産を学ぶ時間を取り入れたとしても、子どもたちは「調べる」となるとどうしてもインターネットで調べます。それならば民間や行政、地域の詳しい方々にお話をしていただく、体験する等で子どもたちの意識を世界自然遺産の方に持って行けるのではないかと思います。ただ、すべての学校で「さあ、やりましょう」としてもできませんので、例えば試験的にどこかの学校で取り組んでみる感じにできればなぁと思っています。そのためには民間もいろいろな活動をしてくださっていますので、それを活用しながら取り組んでいければと思っています。
学校と地域のつながりについてもＡ班のイメージ図に書いていますが、学校は地域の行事に参加し、地域と学校が共同でいろんなことをしています。
そのなかで島唄や八月踊りをしていますが、残念ながらどこの学校も同様かと思いますが児童数が減ってきています。

今まで大規模で実施できていたものが大規模での実施はできない、ではどうするか、０にするのか100のままいくのか、という難しさがあります。100を50にできないか、そうすることですべてを継続していけるようにできないだろうか、と今後はそうしたところもお互い協力しながら進めていければと思っています。

これまで積み重ねてきた大事な地域行事や島全体の行事・文化をいつまでも絶やすことなく続けていけるようにするためにはどのようにしていけばよいかということを今後も考えていけたらいいと思います。

もっともっと子どもたちの目を地元からいろんなところに広げていくためには、先ほど「つながり」という言葉がありましたが、行政・学校・民間・地域のすべてがつながりあっていくことにより、これからも益々発展していくのではないかなと思っています。

◆Ａ班の発表についての他班の委員のコメント①

学校・子どもたちと地域をつなぐ、あるいは民間の企画とつないで次につなぐための提案・キーワードが多く出てきたご説明だったと思います。

学校の規模が小さく、人数が少なくなってきているということも話していたと思いますが、複数の学校が合同で何か企画する・イベントを立ち上げるとかは現状で取り組んでいるのですか？

（Ａ班より、小規模な小学校５校が合同で修学旅行や宿泊学習を実施している旨を説明）

集落も人数が少なくなってきていますが、学校もそういう状況だなと感じました。集落も昔のように勢いのある集落が減っているというのは確かなことなので、昔は競争するくらいの勢いだった集落同士が一緒に合同で行事をやっていくということも織り交ぜられるのかなと発表を聞いていて感じました。

◆Ａ班の発表についての他班の委員のコメント②

学校同士で取り組みをやっていくという話がありましたけれども、うちはマングローブパークでカヌー体験をやっており、住用の学校はわりと来てもらえている。そのため、名瀬の学校に関してもマングローブに遊びに来てもらって興味を持ってもらう、ということをやっていけば、また違った形で取り組みができるのではないかと感じていたところです。

うちの班でも話が出たのが「興味を持たない子が多い」という点。そのため、集落の行事に関しても「諸鈍シバヤ」とか大きな行事に関しては継承がうまくできているのでしょうが、それ以外のところはやっぱり難しくなっているところが多い。子どもが行事に来れば親も一緒に来ると思うので、「子どもたちにいかに興味を持たせていくか」というところも大事ではないかと話が出ました。

そうやって一緒に取り組んでいければいいのではないかと思います。

※注釈：諸鈍シバヤ（ショドン シバヤ）とは加計呂麻島（かけろまじま）の諸鈍集落に伝わる民俗芸能のこと。

◆Ｂ班の発表（新屋委員、濱田委員、吉村氏）

Ｂ班は、自然だけではなく旧暦の行事や奄美の人にとっては日常的な地域でやっていること等、そうしたことを観光客も含めて知ってもらうことが大事かなと思っています。

例えば、地域の行事を子どもたち、次世代に知ってもらうことが大事だと思いますが、実際は、その日は学校があって子どもは学べないし、地域はどんどん高齢化していくのでそうした文化が失われてしまう、継承できないということもあるかと思います。

例えば総合的な学習の時間の中で、子どもたちにこうした行事に参加してもらい、そのときは学校は休みにしてしまう、というのも有りなのかなと思います。昔は休みになっていたらしいので、こうした取り組みも有りかと思います。一応、「休み」というよりも「自宅での総合的な

学習の時間」として、学校に行くのではなく、それぞれの地域に子どもがバラバラになって、そして先生も地域のみなさんと一緒に行事を手伝うという形で、先生や児童に対して旧暦の行事が継承できればなと思っています。

次に地域に対して「こういう風にやったらいいですよ」と指導する形だと地域の方も拒否感が生まれるかもしれませんし、なかなか伝わらないので、その地域で生まれ育って島外でいろいろな技術や知識を得て帰ってきたＵターンの人を増やすということも大事という意見も出ました。ただ、なかなかＵターンの人が帰ってこられない現状もあるので、行政などが主体となってＵターンの人が帰ってきやすい環境づくり、資金的なところもあると思いますしいろいろ仕事に就けるとか、そうした点をサポートすることも大事かなと思っています。

そして、「子育てがしやすい島か」と言われると徳之島等と比べるとそういう環境も少ないと思うので、病院を設立するなど「子育てをしやすい島」にすることも大事かなと思っています。

また、みなさん国道をドライブして行ってしまいますが、例えば世界自然遺産地域の集落や自然があるところ・小道を歩く等はなかなかされないと思います。今は看板も少ないですが、「サイン計画」ということで、小さい道でも車を降りて歩いていきたくなるようなモニュメントや看板を作るということが必要なんじゃないかという意見が出ました。実際にそこに降りて写真を撮りたくなるような場所を島の北部だけではなく、森林が多い南部のところにも作る必要があるかなと思っています。

最後に、ここが１番大事との話になりましたが、学校・行政・民間・地域、それぞれでやりたいことがあって、一緒に連携したいことがあると思うのですが、「実際にどのようにつながったらいいのか分からない」という現状もあると思います。

例えば学校の先生が「地域と何かやりたいけどどういう風にお願いすればいいか分からない」、「環境省に環境教育をお願いしようと思ってもどのように連絡すればいいか分からない」という現状があるとの声もありましたので、「人材バンク」のようなプラットフォームをつくることが大事という意見が出ています。そこに例えば学校側から「こういう授業をしてほしいです」という相談があったときに「民間や地域にこのような対応ができる人がいますよ」と紹介できるようなプラットフォームをつくることが必要であり、こうした取り組みは情熱のある人が担当しなくてはいけないという意見が出ました。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム
令和７年度 第２回公民連携会議　会議録

◆Ｂ班の発表についての他班の委員のコメント

発表を聞いていたところ、やはり我々のところと同じような問題点やこうしたらいいということが出てきましたが、特に最初のキラーフレーズいいですね。「学校が休み」というキラーフレーズは島の子どもたちに刺さると思います。その上でどういった教育に持っていくかということが本当に大事だと思います。

また、そういうなかで子どもたちに興味を持ってもらって、地域の宝を探してもらう。ちょっと前になりますが地域で「宝探しゲーム」ようなものをやった記憶がある。おがみ山の上に行ったら宝箱があって、それを開けたらおがみ山のいろいろな歴史等が書いている。それを何カ所かまわって全部携帯電話で写真を撮って持って行く、というような内容。こうした行政の取り組みはなかったですかね？

（事務局より、市内各所に宝箱があり、あやまる岬等にあったと記憶している旨を説明）

そういった取り組みをまたやってみても面白いじゃないかと思ってふと思い出しました。

最終的には我々の班でも出てきましたけれどもネットワークの構築。地域・学校・行政・民間の共通したネットワーク、プラットフォームのようなものをきちんと作って、そこに行けばいろんな悩みごとや問題点を解決できる、そういったネットワークを構築することがやはり１番の課題というか解決の近道じゃないかなという風に思いました。

◆Ｃ班の発表（稲元委員、境田委員、﨑田委員）

Ｃ班としては前回のワークショップで事務局がまとめていただいた「周知・共有」、「教育・学び」、「発信」、そして「継承」という観点から、どのように取り組むことができるかというそれぞれのつながりについて話し合いをしました。そのなかで、「つながり」ということで学校・地域・民間・行政がどういった形で取り組んだら実現できるかというのが今回のイメージだと理解しながら話しました。

やはり学校で子供が少なくなっているなかで、先程も出ましたが、集落行事に参加する子どもが少ない。中学生くらいになると相撲にしても裸になることに抵抗があったり部活があったりとか、そうしたことでなかなか取り組みができないような状況の集落もあります。田舎の学校はつながっていると思うのですが、街中の学校などはなかなか地域とのつながりが弱い。その辺りを先程Ａ班の発表であったように小規模校の交流もありますが大規模校と小規模校の交流がもっと深まってその地域の行事などにも参加するような状況にもなれば、ひとつのつながりが出てくるのではないかと。またそれは、行政が仲立ちをしてやることが大事かなという意見もありました。

先程発表に出ましたけど、環境学習的なものは各学校から出前授業やふれあいイベント等、そうしたものがあれば環境省は対応していますし行政が登録認定ガイド制度を設けていまして、奄美大島でも多くの方がいると思います。その方々がボランティアで児童を金作原やナイトツアーに連れていく等は行っています。そうしたことをうまく活用して環境教育につなげることが大事じゃないかという風に思います。

民間がやっていることについてもそれぞれ役割分担があって情報発信含め、周知って言うのですかね、そういったことをやらなければならない。

行政としてはインバウンド対応も含めて地域との結びつきをもっと大事にするために、各集落・地域の区長や町内会長を経験した方々が「語り部」になるような、登録認定ガイドとは別の「語り部登録」をする。語り部を登録することによって、「どこの集落・地域に行って、あの人を訪ねたら昔の話ができる」とかそういった登録制度をやっていけば学校教育の場でも話せるでしょうし民間のガイドとの話し合いもできるような形にすればつながっていきますし、他の取り組みも実現するのではないかとの話が出ました。

また、発信するにしても継承するにしても子どもがいないと受け継がれていきませんが、今の親の世代が川遊びとか森に行ったとか、山で何かした・海で何かした等の体験をしていない。親世代が体験していないから子どもに伝わっていなくて、夫婦共働きの家庭が多いなかで子どもにはゲームやスマホを渡しておけば済むみたいな感じになってしまっているから自然の良さとか伝統行事の良さ、本当の意味での遺産登録になった価値ということが伝わっていない。

また、住民も満天の星、白い砂浜、エメラルドグリーンの海を当たり前と思っていて良さの価値を感じないままに来ているから来島者に対してなかなか伝えることができない。やはり奄美には「とうとがなし」じゃな

いですけど「山も神、海も神、ハブも神」という自然を畏れ敬うような精神的なものはまだ残っていると思うので、そういった「“見えないもの”をどう伝えるか」が大事になってくると思います。

それをつなげるのは人しかいないので、語り部登録も含めた人材育成、人をいかに大事にして育てていくか。それをみんなでつないで、ひとつの目的・取り組みを達成できるようにしたらいいかと思います。

※注釈：　「とうとがなし（尊々加那志）」とは奄美群島で使われる、「ありがとう」を意味する方言のこと。

◆Ｃ班の発表についての他班の委員のコメント①

どの班でもだいたいみなさん同じような意見が出てきていると感じました。やはり学校での教育というのも大事だというのがどこの班でも出ていて、私たちの班でも挙がった「子供たちが成長していくと地域のことに興味がなくなっていく」等は、どの班でも出たなぁと思って聞かせていただきました。

やはりそれぞれの年齢での興味・関心がありますので、地域の行事に出ていくとなったら、親が行事に出ていけば子どもが一緒に行く。でも、今は親が興味ないというような世代になってきている。

先程「自然の遊び」というのが出てきましたけれども、そういう遊びも意外と今の親たちが知らない・伝えられないというところもあると思います。じゃあどこがするかって言ったら、学校は学校でやっていると思いますが、保育の現場からお伝えするとやはり０歳児～５歳児までは食べ物であったり遊びであったり、生きていくうえで身につけるものが１番多い時期でいろんな体験をしていくことが大切です。

そうしたいろいろな体験をしてもらいたいが、親がなかなか外に出ないため、やはりどこかで体験ができる場所があったらいいなってすごく思う。今は保育の現場でも「じゃあ私たちが少しでも役に立ちたい」、「子どもたちが奄美で育っている間の体験を大事したい」と親子で川遊びに行く等のイベントをするが親だけではなかなかできない。保育士ができるかといえば保育士もだんだん分からなくなってきている。

地域の人たち・力を活用して、お年寄りの力・先輩の力をお借りして川遊びをやっていく等、もうそういう環境になってしまっているため、本当にこれからの次世代を考えていくうえでは、教えていくだけでなく教えていくなかで楽しさというのも伝えていかないと難しいのかなと思いました。

◆Ｃ班の発表についての他班の委員のコメント②

まずどちらの班でも出た「子どもが少ない」という部分では、これはもう致し方ない部分になっていくのかなと思うので、じゃあそれをどうしていくのかというなかで、今までと形を変えて参加をしていくような方法を検討していくことで、それぞれの学校ごとに協力をしながら形を変えてでも地域とのつながりを続けていければいいのかなと感じました。

また、環境省の出前授業やみなさまそれぞれにいろいろな体験物を子どもたちにやっていきたいという状況で、いろいろな方向での取り組みがあると思いますが、単発であったりそれぞれは継続してやっていたりしても、全体的なプログラムとしてはもしかしたらひとつのものにはなっていないのかな、という今日のお話だったかと思います。

それが子どもたちのなかに息づくには、２年～３年かかるため、先程Ａ班の発表にあったように、まずは試験的でも構わないと思うので、こうした目標・ゴールを決めたなかで年間のプログラムとして実施して、最終的には奄美に住むすべての子どもたちが同様の教育を受けられるような状況になっていけばいいなと思いました。

私たちも世界自然遺産ということではないですが、島の子どもたちに「一緒に働いてもらいたい」、「いろいろな職業を見てほしい」ということで学校でお仕事体験等を実施しています。できればそこを総合的につなぐ、先程Ｂ班からも出た熱意のある人がプラットフォームをつくってという、そういった仕組みができていけばいいのかなと考えました。

最後に、情報発信の部分ですが、私たち航空会社でツアーをつくっているグループもありますけれども、やはり「観光だけではなくて体験をしたい」というツアーが年々増えています。先程Ｃ班の発表にあった「語り部の登録」というのは面白いお話だなと思ったのですが、奄美に来て感じるだけじゃわからない部分も地域ごとの「語り部」がいらっしゃれば、

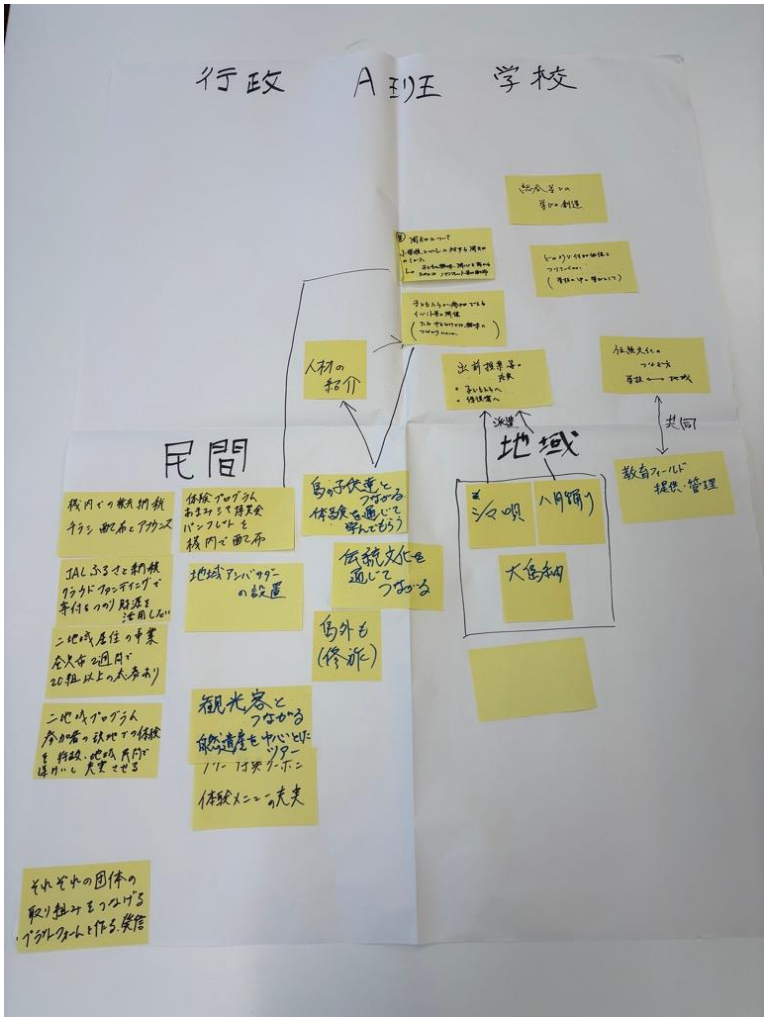
奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム
令和７年度 第２回公民連携会議　会議録

ツアーに組み込むことでさらに奄美を知っていただき、また来たいと思っていただける方、最終的には移住したいという方も増えるんじゃないかなと考えました。

民間だけが外に発信するのではなく、奄美に住む子どもたちへの周知も両立して進んでいければよりよい島になっていくのではないかと感じ、私たちもそこに少しでも協力できる部分があればと思っています。

◆各班が作成したイメージ図

【Ａ班のイメージ図】



奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム
令和７年度 第２回公民連携会議　会議録

【Ｂ班のイメージ図】

【Ｃ班のイメージ図】

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム
令和７年度 第２回公民連携会議　会議録

◆馬場座長より本日のまとめ

前回の会議では「世界自然遺産」をキーワードに以下の２点を考えました。
●つながりを実感している状態
●つながりとは何か

今回の会議では
「どの主体がつながることでどのような取り組みができるか」と具体的なことを考えました。

今回は世界自然遺産にまつわる以下の３点がキーワードでした。
●つながりを感じている状態
●良さを実感している状態
●環境文化を大事にする

⇒そして、もうひとつのキーワードとしては「知識」だと思いました。

「形式知（けいしきち）」
世界自然遺産や環境について、
文字にできる（文章化できる）
形式的な知識

「暗黙知（あんもくち）」
地域や奄美の人々、個人のなかにある
「言葉では伝えづらい」という知識

この両方が「知識」

●世界自然遺産の良さを知っている
●世界自然遺産と関わることの良さを知っている
⇒これらは「知識」です。

このような「知識」について

①保全する
②伝える・交換する
③相互作用により新たな知識を創造する

という３つのステップをうまく繰り返していくことで、
「世界自然遺産とのつながり」をより深く実感していけると思いました。

みなさまの発表にも各主体（行政・学校・民間・地域）のやるべきことが出てきていて、知識の「保全」「伝達・交換」「創造」のどれかに当てはまると思います。

それを「行政としてどのようにサポートできるか」と考えたときに、
この公民連携会議として特色ある提言ができるとすれば
「それぞれの主体をつなぐ受け皿、プラットフォーム」がどうしても必要。

⇒「知識人材プラットフォーム」のようなイメージです。

⇩

「知識人材プラットフォーム」が出来上がると‥‥

①知識人材・組織がプラットフォームに登録される。
⇒本会議のコアメンバーのみなさまも大切な「知識人材」です！

②「知識伝達プログラム」ができあがる。
⇒登録人材・組織が提供できるさまざまな「教材」が増えていきます！

③それぞれの要望をつなげることができる。
⇒「伝えたい人（「知識」のある人）」と「伝えてほしい人（「知識」を必要とする人）」がマッチングできます！

「学校と地域をつなげたい」となったときに、このプラットフォームに一度相談をすると学校側の情報と地域側の情報が一気に手に入るようなイメージです。

このプラットフォームの良い点は「ソフト」であり「何かを建設する」等、「ハード」ではないことです。

点在している「知識資源（＝ソフト資源）」をプラットフォームに集約することで

①知識を保全する
②知識を伝える・交換する
③相互作用により新たな知識を創造する

という３ステップをうまくふめるようになるのかな、という状態です。

現段階での話ではありますが、多様なメンバーの知識に基づいた本会議においての「提言」としてあり得るのではないかと考えています。

馬場座長

４．閉会

次回の会議は１１月１９日（水）開催予定です。

以上。